

2026年1月11日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教67 「一粒の麦として」
 イザヤ53：11～12、ヨハネ12：20～26

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（24節）ここでイエスさまはご自身を種にたとえておられます。麦の種が地に蒔かれる。土の中でその種皮が破れ発芽する。イエスさまもまた天からこの地上に来られ、十字架で死なれ、墓に葬られました。それはまるで種のように地に蒔かれるようなことでしょう。けれどもそれで終わりではありません。そこから三日目によみがえられます。新しい命が芽吹くのです。でも芽吹くためには一度地に落ちて死ぬということを通らなければなりません。種の可能性はそこにあります。ただ種を持っていても、引き出しの中に大事にしまっていて何も起こりません。種のままで。しかしそれを一度手放し、土に蒔くことによって、種の中の命が目覚めるのです。この種の過程がイエスさまの十字架の死とよみがえりに重なるのです。

キリスト者もまたそういう存在です。洗礼を受けるとき、わたしたちは死に、そして目覚めるのです。パウロも言います。「キリストと共に死に、キリストと共に生きる」（ローマ6：8）と。皆さんは、自分の中に新しい命が目覚めている自覚がありますか。「わたしは生きているし、目覚めている」と思うでしょう。確かに体は起きて活動している。でもわたしの中の本当の「わたし」はどうでしょう。神さまにかたどって造られた神さまのかたちである「わたし」です。そのわたしが目覚めているか。実はそこが人として生きる上で一番重要なことです。そしてその本当の「わたし」が目覚めるためには、わたしが一度死ななければならないのです。

カルヴァンは注解の中で「わたしたちの生は、いわばたえざる死なのである」と書いています。わたしが本当に生きるために死に続けなければならない。ここでカルヴァンはコロサイ書の御言葉をあげています。「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです」（3：3）この隠された命こそ、わたしたちが生きなければならない本当の命です。この命が現れるためにこそ死ななければならない。多くの人々は、自分が生きることを願います。自己実現などと申します。自分の願い、考え方が通ることを求めます。またそういう自分の願いを叶える場所が教会だと勘違いしている。だから自分の考えが通らないとへそを曲げて教会に来なくなる。それは自己実現のために教会を、神さまを利用しているということではないでしょうか。神さまの力を借りて、自分の願いや思い描いている幸せを叶えようとしているだけなのではないか。このエゴ、自分が打ち破られなければなりません。それがここで言うところの自分が死ぬということです。

この「一粒の麦」がどういう文脈で出て来た言葉なのかを考えましょう。ヨハネ福音書はここに突如として数名のギリシア人を登場させています。「さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた」（20節）これまでヨハネ福音書ではユダヤ人のことは多く出て来ました。それはイエスさまに敵対する立場として、イエスさまを十字架につける側の人間として登場してきます。特にイエスさまへの殺意を強くしたのが、祭司長、ファリサイ派の人たちです。彼らはユダヤ人の中でも特に中枢にいる人たちです。聖書の教えに厳格であり、その意味では行いにおいても、信仰においても非常に熱心な人たちと考えてよいでしょう。人々からも尊敬され重んじられてきました。でもその彼らがイエスさまを十字架へ追いやっていくのです。どうしてか。それはイエスさまが目障りだからです。自分

たちより中心にいると感じたからです。イエスさまがいると自分たちが中心になれない。そこには自分に死に切れない彼らの強いエゴがあります。

一方でこのギリシア人は初めから蚊帳の外にあったような人たちです。もともと神の民ではない、異国の人たち、救いの外にあると考えられていた人たちです。その人たちが過越祭に来て います。それはものめずらしさに観光に来ていたのかというと、どうもそうではない。「祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に」（20節）とあります。「礼拝する」と訳された言葉はプロスクネオーという言葉で、神さまを礼拝するという意味の特別な言葉です。ひれ伏す、跪くという意味にもなります。自分を低くして、神さまを崇める。神の民ではない外国人の人たちが、神さまを礼拝するためにわざわざエルサレムに来ていたのです。

バビロニア捕囚以降、各地にユダヤ人たちが離散していきました。そこにはユダヤ人のコミュニティーがあり会堂（シナゴーグ）がありました。そこで外国人たちは聖書の教えに触れたのかもしれません。ユダヤ人は聖書の教えに忠実で倫理的にも優れた生活をしていました。その結婚生活、家庭生活の清らかさが、多くの外国人の羨望と信頼を得ていたとも言われています。おそらくこのギリシア人はユダヤ教に改宗した人たちです。それでエルサレムまで巡礼に来ていたのです。「礼拝する」（プロスクネオー）という言葉は跪く、自分を低くして神さまを崇めることですが、彼らはこれまでの自分たちの宗教も風習も全部捨てて、それこそ自分に死んでエルサレムに来ているのです。

イエスさまは、そこに信仰の実りを認められたのではないでしょうか。自分を捨てて、自分が死んでこそ芽生える信仰の実りをユダヤ人ではなくギリシア人の中に見た。自分たちこそ救いの中心にいると思っているユダヤ人ではなく、自分たちは最初からよそ者であり、蚊帳の外だと考えていたギリシア人が実は救いに一番近くにいた。まさに「後にいるものが先になり、先にいるものが後になる」（マタイ20：16）です。遠くにいたものが一番近い。自分は遠いと感じているものこそ、実は神さまの救いをもっとも近くに感じるのです。そこに信仰の逆説があり、また恵みがあると言ってもよいでしょう。イエスさまは、御前にふさわしくない者をこそふさわしくするために、己を捨てて、この世に来られました。「彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに數えられた」（イザヤ53：12）その恵みを彼らは感じたのかもしれません。いやむしろ救いに遠かった彼らだからこそその恵みを感じ取れたと言ってもよいでしょう。

いつまでも古い自分にしがみつき、己に死にきれないわたしたちのために、イエスさまはわたしたちのエゴという固い種皮をその身に負わされて、十字架で死んでくださいました。このイエスさまの死に合わせられて、わたしたちも罪に死に、よみがえりのイエスさまと共に新しい命に生かされるのです。洗礼を受けてイエスさまに結ばれているわたしたちの中にはすでにその新しい命が目覚めています。そしてそれはやがて豊かな信仰の実りをもたらすのです。

天の父よ。自分が邪魔をして聖書から正しくイエスさまの証言を聞き取ることができない弱さを覚えます。けれどもだからこそイエスさまが十字架で死なれ、このわたしたちのエゴ、罪を打ち碎いてくださいました。そしてよみがえりによって、わたしたちにその命の証言を聞き取る信仰の耳を与えてくださいます。どうぞ、イエスさまによって、御前に虚しくされ、あなたの声を聞く者となさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。